

# 「マキアヴェリ」の神(1)

## — 『マルタ島のユダヤ人』における反カトリック主義 —

‘Machevill’'s God:  
Anti-Catholicism in *The Jew of Malta* (1)

森 ゆかり<sup>†</sup>  
Yukari MORI

**Abstract** Over the four centuries of critical traditions on Christopher Marlowe's *The Jew of Malta*(1592), the main instigator of the play, Barabas, a Sephardic Jew, was considered to be an arch-Machiavellian villain, together with Shylock, an Ashkenazic counterpart in Shakespeare's *The Merchant of Venice*. Another widely accepted critical tradition told us that both Barabas and Shylock were the focuses of the anti-Semitic prejudices projected onto the Elizabethan dramas. In this paper, I will refute those two propositions and support Stanic's (2013) view that the real Machiavellian schemer in *The Jew of Malta* is Ferneze, the Roman Catholic Governor of Malta. I will demonstrate that Marlowe used an equivocating casuist, Barabas to caricature the Elizabethan church-papists, who outwardly conformed to the official Church of England but internally gave their pledges to the Roman Catholic Church. After comparing the anti-Catholic to anti-Islamic prejudices recorded in the Mediterranean captivity narratives around the same period, I will argue that through the persona of 'Machavill' staged in the Prologue of *The Jew of Malta*, the anti-Catholicism in *The Jew of Malta* paves the way to his next work, *The Massacre at Paris*, a controversial drama with highly anti-Catholic overtones.

### 1. 問題提起

ヨーロッパ近世、商業資本主義時代に入ると、貿易と商業海運の両方を掌握した者が経済を制した。意外なことだが、『マルタ島のユダヤ人』に登場するセファルディ・ユダヤ人のバラバスは、ユダヤ人を船主として描いた最初期のものだとされている。<sup>1)</sup> 著者のマーローは、国際交易にかかわるユダヤ人についてある程度知っていたようだ。

英国劇作家兼ヨーロッパ大陸で英国政府側の「スパイ」活動もしていたクリストファー・マーロー（1564年～1593年）が最晩年の1591年春頃までに完成さ

せていたとされ、1592年2月26日にローズ座で初演された記録のある『マルタ島のユダヤ人』<sup>2)</sup>は、金のためには手段を選ばない、セファルディ・ユダヤ人バラバスをマキアヴェリ主義の権化として描いた作品と解釈するのが従来の作品批評の伝統である。一方、『マルタ島のユダヤ人』で描かれるユダヤ人バラバスを、シェークスピアの『ヴェニスの商人』に登場するアシュケナジ・ユダヤ人シャイロック<sup>3)</sup>とともに、エリザベス朝演劇において、当時の反ユダヤ感情が直接投影された代表的人物として対比・解釈する長い批評伝統が存在する。しかし近年、この両伝統に疑問を投げかけた研究が出ている。Honan と Stanic の研究である。

本考察では、Honan と Stanic の研究を概観した後、マーローが『マルタ島のユダヤ人』において、どの程度まで反ユダヤ言説を意図して執筆したのかを再検討する。

<sup>†</sup> 愛知工業大学 基礎教育センター（豊田市）

エリザベス朝当時、church papists（表向きは英国国教会の礼拝に参加するが、心ではローマ教皇に忠誠を誓うローマ・カトリック教徒）<sup>4)</sup>や、カトリック国教忌避者（ローマ教皇と袂を分かった英国国教会の礼拝参加を拒否するローマ・カトリック教徒）が使用すると信じられていた、「多義の虚偽」(equivocation)や「心裡留保」(mental reservation)による「詭弁」(equivocation)をマーローは、劇中バラバスに模倣させ、ユダヤ人バラバスの言動を徹底的に愚弄することで、『マルタ島のユダヤ人』がイングランドのローマ・カトリック教徒を風刺していること、またユダヤ人バラバスのマキアヴェリ主義的戦略がいつも、ローマ・カトリックのファーニーズによって出し抜かれて、意図的に破綻させられていることを見た上で、『マルタ島のユダヤ人』が、反ユダヤ言説を借りた反カトリック言説であることを主張する。次に同時代の地中海沿岸地域捕囚記資料から、イスラム教徒より恐ろしいのはローマ・カトリック教徒であるとされていることを指摘して、この時代における複雑な諸宗教観を考察するものとする。

最後に、マーローが『マルタ島のユダヤ人』を、反ユダヤ言説というよりはむしろ反カトリック言説を意図して執筆し、彼最晩年の作品である『パリの虐殺』への序章となっていることを指摘することとする。

## 2. 「彼相応に好意の目で見てやってくれ」

### —『マルタ島のユダヤ人』で真のマキアヴェリ主義者はユダヤ人バラバスか、それとも？—

まず、バラバスをマキアヴェリ主義の権化と解釈する批評伝統に対する反論から始めよう。Stanicによると、『マルタ島のユダヤ人』について、批評家たちが従来、ユダヤ人バラバスのマキアヴェリ主義に注目しすぎてしまい、マキアヴェリが『君主論』で記述する君主像が、劇中で描かれるバラバス像と大きく食い違っている点を見落としてしまっていると指摘する。バラバスは愛する娘と財産を失ったことで見境のない復讐心に突き動かされて暴走し、またトルコのカリマスからマルタ島総督になるよう要請されたにもかかわらずこれを拒否するという致命的な失敗を犯して、自ら破滅への道を選択する。バラバスのこうした行動は、冷徹な計算と術策をめぐらすマキアヴェリ主義者にはふさわしくないのだという。<sup>5)</sup>

では、『マルタ島のユダヤ人』における真のマキアヴェリ主義者とは一体誰なのか。Stanicは、舞台で二次的な役割しか果たさず、あまり表に出ないためほとんど注目を惹かないが、最終的にはマルタ島の統治権を奪還す

ることになるマルタ島総督で騎士団の指導者（当然ローマ・カトリック教徒）のファーニーズが、『マルタ島のユダヤ人』で描かれた真のマキアヴェリ主義者であると主張する。<sup>6)</sup>

劇中、ファーニーズは、マルタが長年トルコに年貢金を収めてきたにもかかわらず、トルコがその年貢をマルタ島の全財産をなげうっても支払い切れないほどの金額にはねあげ、それにつけこんでこの町を乗っ取ろうとしている<sup>7)</sup>という国家危機の際、第2幕第2場でスペイン副総督マーティン・デル・ボスコが飛龍号に乗船してマルタ島に到着したことで、<sup>8)</sup> 臨機応変、スペインと手を結んでトルコを裏切り、トルコに年貢を支払わずに済ませる一方、トルコへの年貢支払いのためにマルタのユダヤ人共同体とバラバスから捲き上げた財産はそのまま懐に収め、一挙両得、眼の上の「たんこぶ」だった豪商バラバス自身も破滅させ、デル・ボスコにはトルコ船を拿捕する時間稼ぎをさせて、最終的にはトルコから、マルタ島総督として統治権を奪還するのである。<sup>9)</sup>

ファーニーズのこうした行動は、マキアヴェリ政治思想の adaptability を体現するものであると Stanic は主張する。<sup>10)</sup> マキアヴェリ政治思想の adaptability は、『君主論』第15章でこう説明されている。

一つの悪徳を行使しなくては、政権の存亡にかかわる容易ならざるばあいには、悪徳の評判など、かまわず受けるがよい。というのは、全体的によくよく考えてみれば、たとえ美德と見えても、これをやっていると身の破滅に通じることがあり、たほう、一見、悪徳のようにみえても、それを行うことで、みずからの安全と繁栄がもたらされる場合があるからだ。<sup>11)</sup>

このマキアヴェリの教説に該当するのは「危急の際にはどんな策略を使うにも遠慮することはない」<sup>12)</sup>と主張するバラバスばかりではなく、ファーニーズでもあることは明白であろう。ファーニーズがマキアヴェリ的君主であることは、Honan も認めるところである。<sup>13)</sup>

次に『マルタ島のユダヤ人』における反ユダヤ言説の果たす役割について再考しよう。Honanは、当時のロンドンっ子にとってユダヤ人との接触が極めて稀であったことを指摘する。<sup>14)</sup> エリザベス女王毒殺を企てたとして当時のロンドンを驚愕させたエリザベス女王のユダヤ人侍医 Dr. Roderigo Lopez は1594年6月7日に処刑されているが、<sup>15)</sup>ここで私が強調したいのは、事件が発覚したのはマーロー没後のことであって、マーローが『マルタ島のユダヤ人』を執筆した当時の対ユダヤ人感情と、ロベス事件発覚後の反ユダヤ人感情とはかなりの温度差

があるという点である。Honanによると、マーローの名声は、『マルタ島のユダヤ人』で上がったのであるが、皮肉にもマーローの没後、ロペス博士の裁判が始まってから再度『マルタ島のユダヤ人』の上演回数が爆発的に増加しているのだ。<sup>16)</sup>

したがって一度再検討する必要があるのは、果たしてマーローがどこまで反ユダヤ言説を意図して『マルタ島のユダヤ人』を執筆したのかどうかということである。『マルタ島のユダヤ人』のプロローグは、「マキアヴェリ(Machevill)」(以下、「」付きの「マキアヴェリ」は、『マルタ島のユダヤ人』プロローグに登場する人物を指すものとし、フィレンツェの政治思想家、ニコロ・マキアヴェッリ(1469年～1527年)とは区別するものとする。理由は後述する)自身が登場して以下の独白で始まる。

「マキアヴェリ」 マキアヴェリは死んだ、と世間では思っているようだが、その魂はアルプスを越え、フランスのギーズ公爵に乗り移っていた、公爵も死んだのでフランスを去り、この国を見物し、友達と遊びまわろうってわけだ。<sup>17)</sup>

劇中、「マキアヴェリ」が自ら、自分の魂が乗り移ったと認めるフランスのギーズ公爵とは、第3代ギーズ公アンリのことであり、<sup>18)</sup> 歴史的眞偽はともかく、ローマ・カトリック教徒がプロテスタント・ユグノー教徒を大量虐殺した聖バーソロミューの虐殺についてその陣頭指揮を執ったとされる人物である。1572年8月18日、フランス国王シャルル9世の妹 Marguerite de Valois とプロテスタントのナヴァールのアンリの結婚を機にユグノー教徒が首都パリに集まっていた際、ユグノー教徒の指導者コリニー提督暗殺未遂事件(8月22日)を皮切りに、聖バーソロミューの祝日(8月24日)から3日間で、4000名にのぼるユグノー指導者およびパリ市民が虐殺された。<sup>19)</sup> このギーズ公アンリが1588年12月23日に、フランス国王アンリ3世の配下に暗殺され、<sup>20)</sup> 1589年8月1日、今度はその国王アンリ3世も、ドミニコ会士ジャック・クレマンによって暗殺され、ヴァロア家は滅亡した。<sup>21)</sup>

こうした歴史的経緯をふまえ、「マキアヴェリ」が自ら、自分の思想を表現すると独白するギーズ公が暗殺されてしまったので、フランスを出国し、友人とイングランドで遊びまわるといふ。一緒に遊びまわるには、英国内に知人や仲間が必要だが、マキアヴェッリの『ディスコルシ』と『君主論』の英語訳はそれぞれ、1636年と1640年まで出版されなかったものの、イングランドで

は16世紀を通じてイタリア語、フランス語訳、ラテン語訳でマキアヴェッリ著作が流布していた可能性が極めて高く、<sup>22)</sup> 1560年に『君主論』のラテン語訳が出版され、即座に国際的な注目を浴びたのち、<sup>23)</sup> 1584年には John White がイタリア語版の『ディスコルシ』および『君主論』をロンドンで極秘出版、以後、『戦争の技術』、『フィレンツェ史』のイタリア語版も出版されることとなる<sup>24)</sup>。メアリ治下ではマキアヴェッリの影響は跡形もなく消えてしまうが、エリザベスが即位するとマキアヴェッリの影響は急速に拡大したという<sup>25)</sup>ので、『マルタ島のユダヤ人』プロローグに登場する「マキアヴェリ」は英国を物見遊山して、沢山の知人と遊びまわることが可能だったのである。

『マルタ島のユダヤ人』プロローグの「マキアヴェリ」は自らの思想を続けてこう語る。以下の引用に見られる反カトリック言説は、エリザベス時代のロンドンっ子の大喝さいを浴びたに違いない。

「マキアヴェリ」 おれはおれをもっとも憎むやつに高く買われているんだ。おれの本をおおっぴらにこきおろすやつもいるにはいるが、そういうやつもおれの本を読み、そのおかげで教皇の椅子にありついたりする、おれを投げ捨てればよじ登ってくるおれの信者たちに毒殺されるのがおちだ。おれは宗教など子供のおもちゃにすぎぬと思っている。そして無知以外に罪はないと固く信じている<sup>26)</sup>

「おれをもっとも憎むにもかかわらず、おれを高く買い」、「おれの本をおおっぴらにこきおろす」にもかかわらず、「おれの本を読む」のは、そのあとに「そのおかげで教皇の椅子にありつく」と続けていることから分かるように、ローマ・カトリック教徒のことを示唆し、1557年マキアヴェッリの名が教皇庁の禁書目録 *Index Librorum Prohibitorum* に入れられたことを指す。<sup>27)</sup>「おれを投げ捨てれば、教皇の椅子によじ登ってくるおれの信者たちに毒殺される」イメージは、『マルタ島のユダヤ人』第3幕第4場でも「主人の教皇を毒殺したボルジアの酒」<sup>28)</sup>として再登場するが、これは、1503年、フィレンツェのチェーザレ・ボルジアが自らの父でもあったらしい教皇アレクサンデル6世を毒殺したとされる事件を指す。<sup>29)</sup>また後にジョン・ダンが『イグナチウスの秘密会議』(1611年)で展開した、イグナチウス・ロヨラが反逆によって教皇を追い出すという反カトリックのイメージにも引き継がれることになる。<sup>30)</sup>

上記引用の最後にある「宗教」に関するくだりは当然、『君主論』第18章の以下の引用と並行するものである。

君主は、ことに新君主のばあいは、世間がよい人だと思ふような事がらだけを、つねに大事に守っているわけにはいかない。国を維持するためには、信義に反したり、慈悲にそむいたり、人間味を失ったり、宗教にそむく行為をも、たびたびやらねばならないことを、あなたには知っておいてほしい。したがって、運命の風向きと、事態の変化の命じるがままに、変幻自在の心がまえを持つ必要がある。<sup>31)</sup>

「運命の風向きと、事態の変化の命じるがままに」バラバスは、マルタのファーニーズを裏切りトルコのカリマスと手を結び（実際のところユダヤ人はトルコと手を結ぶ裏切り者であるというイメージは16世紀ヨーロッパ・キリスト教社会全体に広がっており、こうした言及が同時代の外交文書に多数残っている<sup>32)</sup>）、さらにカリマスを裏切ってファーニーズと手を結ぼうとし、一方、ファーニーズは、トルコを裏切ってスペインのドン・ボスコと手を結び、トルコのカリマスに服したかと思せかけて、バラバスもろとも罠にかけ、マルタ島の支配権を奪還する。ユダヤ人のバラバスも、ローマ・カトリック教徒のファーニーズも、マキアヴェリが『君主論』第18章で描いた *adaptability* の理想を体現するが、陰謀策略を使って最終的に勝利するのは、ローマ・カトリック教徒のファーニーズである。したがって、プロローグの「マキアヴェリ」が以下の台詞を述べる際、ユダヤ人バラバスへの悪意について観客に「彼相応に好意の目で、おおめに見てやってほしい」といっているのは、バラバスがファーニーズほど「マキアヴェリ」主義を貫徹できていないからなのだ。

「マキアヴェリ」だがおれはどこへ行こうとしていたのだ？このおれはここブリテンにお説教をしにきたわけではない、おれの術策によらねば手に入らなかったはずの金が金袋にいっぱいつまっているのを見てニヤニヤしているあるユダヤ人の悲劇を上演するためにきたのだった。これだけはお願いしておく、そのユダヤ人を彼相応に好意の目でみてやってくれ、彼がおれみただからと言ってそれだけ悪意を抱かないでほしい。<sup>33)</sup>

前述のように「マキアヴェリ」の教説はすでに英国に浸透しているので、「マキアヴェリ」が自ら出向いて自説を説教する必要はない。完璧なる「マキアヴェリ」主義者、ローマ・カトリック教徒のファーニーズと比較すれば、ユダヤ人バラバスなど、まだかわいいものなのだから、

「彼相応に好意の目でみてやって」ほしいと言うのである。

Honan は、マーローが『マルタ島のユダヤ人』で、反ユダヤ感情と反カトリック感情の両方を途方もなく膨張させ、それらをともに愚弄している点を指摘する。<sup>34)</sup> もしそうであるとしたら、『マルタ島のユダヤ人』において、バラバスが「マキアヴェリ」主義を貫徹できなかったために自ら招いた破壊的結末は、一方で本作品中、喜劇としての機能も果たしており、バラバスの破滅が悲劇的なものであればあるほど、バラバスの破綻した「マキアヴェリ」主義も舞台上で滑稽化され、バラバスが模倣したローマ・カトリックの「マキアヴェリ」的術策も愚弄されることになるのである。そうすることで、バラバスの運命を翻弄したファーニーズの完璧な「マキアヴェリ」主義、ひいてはローマ・カトリックという宗教が持つ「いびつさ」をも、愚弄することができるのだ。バラバスの悲喜劇は、『マルタ島のユダヤ人』において、ユダヤ人を愚弄すると同時に、ローマ・カトリック教徒をも愚弄するのである。

では、一体何故、『マルタ島のユダヤ人』において、反ユダヤ感情と反カトリック感情を連動させて、ユダヤ人とローマ・カトリック教徒をともに愚弄することが可能だったのであろうか。次セクションでは本作品における反ユダヤ言説と反カトリック言説の並行性を、宗教的二重忠誠と詭弁使用の点から分析することにしたい。

### 3. ユダヤ暦と2つのキリスト教暦のはざまで —バラバスとエリザベス朝ローマ・カトリック教徒 の二重忠誠と詭弁(casuistry)—

ユダヤ人は新年・祝日にキリスト教徒の有力者に一種の税として贈り物をさせられることもあったという。<sup>35)</sup>『マルタ島のユダヤ人』第3幕第4場で描かれた「聖ジャックのタベ」の慣習は、ユダヤ人だけに特別に課された税ではないものの、異教徒のユダヤ人も、マルタの有力カトリック女子修道院に寄進しなければならないのだ。

バラバス マルタでは「聖ジャックのタベ」と呼ばれる古くからの慣習があつてな、ここの連中が女子修道院に食べ物などを寄進することになっている、そこでほかのものにまぎれてこいつをおいてくるんだ。<sup>36)</sup>

実は、全ヨーロッパのほとんどのユダヤ暦には、キリスト教の主要祝祭日が記載されており、<sup>37)</sup> 地方により崇敬されるキリスト教聖人が異なるためにユダヤ暦に記載

されるキリスト教聖人の記念日も地方ごとに異なるといふ。国際交易に従事するユダヤ人の移動範囲が拡大していたため、中欧、東欧のユダヤ暦にはプロテスタント（ユリウス暦）、ローマ・カトリック（グレゴリオ暦）、正教会の暦も記載されていたらしい。<sup>38)</sup>ユダヤ暦にはこのようにキリスト教の祝祭日、キリスト教聖人の記念日、各地の市場の日取り等が併記されることになるのだが、<sup>39)</sup>ユダヤ人は、異教徒の祝祭日には異教徒との、ある種の接触を避けるように勧められていたにも関わらず、異教の祝祭日前後に異教徒との商業活動が禁じられれば、キリスト教暦には祝祭日が多すぎるため、ユダヤ人がほとんど全ての市に参加できなくなってしまうため律法遵守が難しかったといふ。<sup>40)</sup>

また、ユダヤ人の間で、国際交易の領域ではユダヤ人の宗教法ではなく国際的慣習に従うことが受け入れられており、ユダヤ教の宗教的指導者であるラビたちは当時、ユダヤ教以外の異教徒の裁判所にユダヤ人が告発することを繰り返し禁止しているにもかかわらず、一向にこれがやまず、ユダヤ人の商業活動がユダヤ律法下でないことを認めざるを得ない状況であった。<sup>41)</sup>シェークスピア『ヴェニスの商人』に登場するアッシュケナジ・ユダヤ人シャイロックも、ラビの法廷ではなくキリスト教徒の裁判所に商売敵のアントーニオを告発しているが、こうした案件も、ラビたちが嘆くこうした事例のひとつである。

暦と裁判の例を見ても分かるように、もともと異教徒との接触を避ける禁忌規定が厳しいユダヤ教徒が、キリスト教支配下で生活していくには、実生活上こうした様々な障壁が生じることになる。それに加え、Cohenも指摘するように、同じ異教徒でもイスラム支配下のユダヤ人は、キリスト教支配下のユダヤ人より、実質上より安全で、政治的・文化的にも融和していたようである。<sup>42)</sup>キリスト教支配下のユダヤ人はイスラム教支配下のユダヤ人と比較して、より過酷な境遇に置かれていたのである。

ユダヤ人たちは、キリスト教支配下ではユダヤ教の禁忌規定を十分守ることができず、キリスト教徒からの宗教的圧迫の下、キリスト教徒と共存する方策を模索しなければならなかったが、イベリア半島の故国を追われたセファルディム・ユダヤ人のうち、キリスト教徒に改宗したユダヤ人、一いわゆる「新キリスト教徒」別称「コンヴェルソ」一、および「新キリスト教徒」のうち密かに元のユダヤ教に再改宗したユダヤ人、一蔑称「マラーノ」<sup>43)</sup>—の場合は、さらに状況が複雑になる。

カスティリア女王イザベラとアラゴン王フェルディナンドによるレコンキスタ後、イベリア半島のユダヤ人

は、まず1492年にスペインから、1497年ポルトガルから追放されたが、教皇パウル4世が、スペインからのユダヤ人追放またはポルトガルでのユダヤ人強制改宗以降にイベリア半島に生まれたか居住したユダヤ人は、キリスト教の洗礼を受けたものとみなすと裁定したため、これらユダヤ人がユダヤ教信仰行為を行ったことが見つかった場合には、ユダヤ教に再改宗した罪に問われることになった。<sup>44)</sup>

「マラーノ」は「新キリスト教徒」として表向きはキリスト教の信仰を告白するのだが、家族内ではユダヤ教の信仰を守り、いわば宗教上の二重忠誠の境遇におかれていた。これはとりもなおさず、表向きは英国国教会の礼拝に参加し信仰告白をするイングランドのローマ・カトリック教徒、一特に Alexandra Walsham が church papist と呼ぶ<sup>45)</sup>ローマ・カトリック教徒一が置かれた境遇と期を一にする。マラーノが『マルタ島のユダヤ人』において、反ユダヤ感情と反カトリック感情を連動させて、ユダヤ人とローマ・カトリック教徒をともに愚弄することができるのは、ユダヤ人の「マラーノ」と、ローマ・カトリックの“church papist”に共通する、この宗教上の二重忠誠なのだ。

バラバスが「マキアヴェリの生地フィレンツェで学んだ」偽装の技術は、宗教上の二重忠誠を習慣とするユダヤ人「マラーノ」にもローマ・カトリックの“church papist”にも、その身体、生命、財産を守るために体得すべき術策なのだ。バラバスは自分の偽装の技術をこう説明する。

バラバス おれたちユダヤ人はいつでもスパニエルのようにこびへつらいながら、ニヤッと笑って噛みつくんだ。顔つきは子羊のようにあどけないままでな。おれはマキアヴェリの生地フィレンツェで学んだが、犬とののしられたら自分の手にキスし、肩をすくめ、はだしの修道士のようにペコペコ腰をかがめておいて、心のなかではクリスチャンどもが飢え死にするのを願い、…<sup>46)</sup>

宗教上の二重忠誠を習慣とするユダヤ人、バラバスはまたこう宣言する。

バラバス 心にもないことをはじめから真実らしくみせかけるほうが、はじめは真実のつもりであとでみせかけるよりまだいい、いつわりの信仰告白を堂々とするほうが、人目につかぬ偽善をこそこそするよりましなのだ。<sup>47)</sup>

バラバスのこの台詞にマキアヴェッリ『君主論』第18章の悪名高い以下の教説が反映しているのは明らかだ。

要するに、君主は前述のよい気質を、なにからになにまで現実にそなえている必要はない。しかし、そなえているように見せることが大切である。いや大胆にこういつてしまおう。こうしたりっぱな気質をそなえていて、後生大事に守っていくというのは有害だ。そなえているように思わせること、それが有益なのだ、と。たとえば慈悲ぶかいとか、信義に厚いとか、人情味があるとか、裏表がないとか、敬虔だとか、そう思わせなければならない。また現実にそうする必要はあるとしても、もしもこうした態度が要らなくなったときには、まったく逆の気質に変わりうる、ないしは変わる術を心得ている、その心構えがなくてははいけない。<sup>48)</sup>

さて、先程引用した「聖ジャックの夕べ」に関するバラバスの台詞に戻ろう。「ほかのものにまぎれて」置いてくるものとは、毒薬である。父親の策略によって、恋人のドン・マサイアスが殺されてしまったことを知った娘のアビゲールが、今度は本当にユダヤ教を棄教してカトリック女子修道院に入ってしまったことを、第3幕第4場で知ったバラバスが、「聖ジャックの夕べ」で寄進する食べ物に毒薬を混ぜて、娘のアビゲールともども女子修道院共同体全体を殺害しようとする場面である。

毒薬を使って修道院共同体全員を殺害しようとするプロットは、そのモデルとされる事件が存在する。当時Rheimsにあったカトリック司祭養成のために設立された英国学寮で、英国政府側のスパイとして学寮に潜入していたRichard Bainesが、井戸と共同風呂に毒を入れて学寮共同体全員を殺害しようと計画し失敗した事件である。Bainesは、ケンブリッジ大学内でローマ・カトリック色の強いとされるCaius学寮出身、1578年に大陸に渡航、Rheims英国学寮入学後、1581年にはローマ・カトリック司祭に叙階した。Bainesは、学寮生を誘い、高額報酬で英国政府側のスパイとなるよう勧誘していたばかりか、日々学寮礼拝堂でミサを挙げながら、後にローマ・カトリック枢機卿となる学寮長のWilliam Allenをはじめ、学寮員全員を毒殺しようと目論んでいたのだ。この計画は事前に露見し、1582年5月29日から一年近く投獄された後、学寮追放処分を受けてBainesは英国帰国。帰国後はリンカーンシャー、Walthamの教区司祭として赴任する。今度は英国国教会の司祭として、である。<sup>49)</sup>このBainesという男、危険と隣り合わせのスパイ活動をしていたマーローを2度も当局に通報したばかりか、マーローが無神論者であると

暴露したことで有名である。<sup>50)</sup>実は、マーローもBainesもともに英国政府側のスパイとしてヨーロッパ大陸に渡り、大陸各地のカトリック拠点を嗅ぎまわって情報活動をしていたのだ。<sup>51)</sup>

他方、井戸に毒薬を投げ込んで共同体全員を大量虐殺するというイメージは、中世以来ユダヤ人と深く結び付けられてきたものでもある。キリスト教圏のユダヤ人は12世紀以降、宗教的・社会的迫害を受け、十字軍時代には大規模なユダヤ人虐殺がヨーロッパ各地で起きたが、その際、ユダヤ人虐殺を正当化する理由として、ユダヤ人はキリスト教徒の子供を儀礼殺人する、共同体の井戸に毒薬を投げ込む、「キリストの体」である聖体を盗んで拷問する等がよく使われた。<sup>52)</sup>キリスト教徒の子供を儀礼殺人するというのは、1171年フランス・ブローアで最初に儀礼殺人の告発があったのを皮切りに、いずれも真偽はともかく、ヨーロッパ各地で同種の記録が残っており、<sup>53)</sup>また、井戸に毒を投げ込む俗信については、1348年から1350年に黒死病が流行した折に、ユダヤ人が井戸に毒を入れたのが原因だとして、ヨーロッパ各地でユダヤ人の虐殺が発生した。イスラム世界でも同様に黒死病が流行したにもかかわらず、ユダヤ人虐殺は起きなかったのだという。<sup>54)</sup>

さて、ここまでで「宗教上の二重忠誠」、「共同体に毒を盛って大量虐殺する」という2つのイメージで、ユダヤ人とローマ・カトリック教徒をつないできたが、「宗教上の二重忠誠」を誓わなければならないければ、身体・生命・財産の危険を冒すことになるキリスト教支配下のユダヤ人と英国国教会のイングランドにおけるローマ・カトリック教徒はどのようにこの危機を乗り切ったのであろうか。

Roseによると、うそをつかずに真理を言わずに済む方法として「多義の虚偽 (equivocation)」と「心裡留保 (mental reservation)」があるという。<sup>55)</sup>

「多義の虚偽」とは、話し手の発話が、よく考えると2通りに解釈されることを利用して、嘘をつかずに真理を言わずに済ませる方法である。すなわち、発話文において、—1) 発話文が表す命題が、事実と照らして真となる解釈と、2) 聞き手がこう解釈するであろうと話し手が期待し、事実と照らすと偽となる解釈—の2通りの意味で曖昧になることを利用して言い逃れる方法である。尋問者が尋問する権限を持っていない場合にのみ使用が認められるという。<sup>56)</sup>

一方、「心裡留保」とは、「多義の虚偽」より正当化するのが難しい「詭弁」だが、耳で聞こえるよう明確に表出された命題の真理値は偽であるが、話し手が心の中で、ある想定された条件を加えることで、その真理値を真に

変えることができるものである。ただし英語の場合、真理値が偽である陳述に、心の中で発音されない“not”を加えて、偽である陳述を「心裡留保」で真に変えることは、カトリック倫理神学者の誰もが倫理的に容認しない。

例を挙げてみよう。カトリック司祭はその正体が発覚すれば死刑に処せられるエリザベス女王治下のイングランドで、カトリックの司祭かどうかを当局に尋問(当然、拷問もある)されているカトリック司祭が、「自分は【デルファイのアポロ神殿の】司祭ではない」の【デルファイのアポロ神殿の】部分を言葉として表出しないことで言い逃れるのが「心裡留保」である。また、エリザベス女王治下では、カトリック教徒がヨーロッパ大陸へ渡航することが禁止されていたが、海外渡航歴を尋問されているローマ・カトリック教徒が、「自分は【インド】洋を渡ったことがない」の【インド】部分を心の中で言い、尋問相手に言葉で伝えないことで、嘘をつかずに真理を隠蔽することができるのだ。<sup>57)</sup>

1580年代前半、ヨーロッパ大陸で司祭養成を行っていたイングランドのローマ・カトリックの指導者、前述の William Allen と Robert Persons は、ローマ・カトリック司祭が信徒の聴罪を行う際使用する倫理神学の手引書を編集していたが、これは Douai-Rheims に彼らが設立したカトリック司祭養成所である英国学寮でも使用されていた。この時代の英国カトリック倫理神学書は、本国の信徒が国教忌避による巨額の罰金、財産没収、死刑などを課されていたために、国教忌避に関してかなり柔軟な立場をとっており、英国カトリックがその生存のために、カトリックとしての宗教的アイデンティティを隠す目的で「多義の虚偽」を使うことを認めていたとされる。<sup>58)</sup>この手引書自体は、未出版なので直接引用することができず残念だが、1630年代に実際に使用されていた同種の倫理神学手引書は昨年公刊されてその詳細を知ることができる。1630年代ともなると、半世紀前に比べてカトリック信徒の処刑数はかなり減少したが、司祭には依然、身の危険が残っていたこともあり、公益のため、カトリック司祭に対する倫理基準は緩和されたままだったという。<sup>59)</sup>この倫理神学手引書から、当局に尋問されている司祭が「多義の虚偽」を使用してもいいかどうかについて規定している部分の英訳(原文はラテン語)を、少し長い以下に引用してみよう。こうした聴罪司祭用の倫理神学手引書は伝統的に問答形式になっている。

*May priests in England lawfully deny that they are priests, deny their true names and their country etc., either in court or otherwise? And what if they are*

*asked to confirm these things under oath?*

I reply that priest may lawfully deny all these things, and confirm them with an oath, provided they use some lawful amphibology; that is, equivocation, or mental reservation. This is because they are not bound to tell the truth if it involves such danger to themselves, but may conceal or dissimulate it, since it is not evil to do this for a just cause. Indeed, they may use either equivocation alone, or mental reservation... The reason is that to use mental reservation pure and simple in a just cause is not to lie, because the speaker says nothing contrary to what is in his mind;... it is lawful to swear in this way for a just reason (which it is accepted must always be a serious reason), even if the oath forces the swearer to exclude all equivocation by whatever repetition of words (and round and round in circles forever) , and , in swearing the oath, the swearer has a right to use the lawful mental reservation of phrases like, ‘as I will tell you,’ ‘as far as I am bound,’ or other similar things, which when combined with the spoken words, make the meaning true.<sup>60)</sup>

英国カトリック司祭は、司祭であること、本名、本国を否定したり、宣誓した上でこれらを否認してもよいかという問いに対し、この手引書の著者は、これらすべてを否定する言明を行うのは合法で、「多義の虚偽」もしくは「心裡留保」などを使っていれば宣誓の上、否認してもよいと言っている。なぜなら身体の危険がある場合には真理を言う義務はなく、また正当な理由がある場合には、事実を偽り隠すのは嘘にはならないという。正当な理由がある場合に「心裡留保」を使っても嘘にならないのは、話し手が自分の心の中にあることと反対のことは何も言っていないからなのだという。

さて、こうした当時のカトリック倫理神学を踏まえると、劇中バラバスが多用する(傍白)が一体何のパロディーなのかは明白であろう。これらはまさに、迫害下のイングランドにおいてローマ・カトリック倫理神学がその使用を認める「多義の虚偽」と「心裡留保」なのである。

厳しい迫害下にある信徒や司祭のために、カトリック倫理神学が当時やむを得ず容認していた「多義の虚偽」と「心裡留保」を、異教徒の「ユダヤ人」、「マラーノ」のバラバスに舞台上で敢えて使わせ、彼の露悪的な大言壮語に彩りを加える。こうしたマラーノの痛烈なローマ・カトリック風刺を、エリザベス時代の観客は栈敷で笑い

転げて聞いていたに違いない。エリザベス女王治下で、ローマ・カトリックの「多義の虚偽」と「心裡留保」は、英国国教会の神学者に繰り返し批判され、また英国国教会の教区司祭も日曜日の説教壇から二重忠誠を誓うローマ・カトリック教徒の偽善を、事あるごとに非難していたため、神学とは縁の遠い庶民にも馴染み深いものだったからだ。バラバスの科白から「多義の虚偽」と「心裡留保」の例をいくつか例をあげてみよう。まず、「心裡留保」の例である。

バラバス フム。マルタ島のユダヤ人は全員行かなければならんと?... じゃあ、兄弟たち、出かける用意をして、形の上だけでもその集会に参加しようじゃないか。万一おれたちの身にかかわるようなことでもあれば、安心しておれにまかせるがいい— (傍白) おれ自身のことはな。<sup>61)</sup>

次に引用する台詞が使われる第2幕第3場では、バラバスが、娘のアビゲール目当てに接触してくるファーニーズの息子、ロドウィックを欺く算段をしているところである。バラバスは「多義の虚偽」と「心裡留保」を多用してロドウィックを自宅におびき寄せ、娘のアビゲールに偽りの「信仰告白」ならぬ、「愛の告白」をさせた上で、恋敵のマサイアスとロドウィックを決闘させ、バラバス自ら手を下すことなく、敵の息子ロドウィックとアビゲールの本当の恋人であるマサイアスの殺害に成功する。

バラバスは「あたしの」ダイヤモンドという表現に宝石の「ダイヤモンド」と、「アビゲール」という2つの指示対象を担わせて「多義の虚偽」のトリックを駆使するのだ。

ロドウィック ところでバラバス、ダイヤモンドを一つ手に入れてくれないか?

バラバス あたしのダイヤモンドは全部親父さん(ファーニーズ)が手に入れましたよ。あなたのお役に立ちそうなのが一つだけ残ってますがね。(傍白) 言うのは娘のことだが、こいつが手に入れるまでにおれは薪の束の上で娘を生贄にしてしまうだろう。おれがこいつにくれてやるのは、流行の伝染病とレブラクラいのものだ。

ロドウィック よく光ってるだろうね、疵はないね?

バラバス あたしの言うダイヤモンドは疵物じゃありませんよ。(傍白) だがこいつに触れられたら疵物になっちゃうがね— ロドウィック、そいつは美しく輝いてますぜ。

ロドウィック ちゃんとカットして、磨いてあるだろ

うね?

バラバス 磨き上げてありますよ— (傍白) あんたのためじゃないがね。

...

ロドウィック で、値段は?

バラバス (傍白) あんたのいのち、ってことだ、あれを手にいれりゃ— 値段のことでごたつくのはよしましよ、あたしの家においでなさい、さしあげますよ— (傍白) 復讐の心をこめてな。<sup>62)</sup>

もうひとつ挙げてみよう。第4幕第3場、ロドウィックとマサイアス殺害の真相を知っており、愛する娼婦ベラミラに貢ぐために金を工面する必要が生じたバラバスの奴隷、イサモーが、街のごろつき、ピリア=ボルツァを使いやって、バラバスを脅迫し金をせびる場面である。口止め料をどんどん釣り上げてくるイサモーの使い、ピリア=ボルツァに対して、ユダヤ人バラバスは、以下の「心裡留保」を使い、自ら変装して、脅迫してくる3人組に毒薬を仕込んだ花束を贈るのである。

バラバス (傍白) この悪党(ピリア=ボルツァ)め、消しちまう必要がありそうだな— いっしょに食事でもどうかね、うんとごちそうするぜ— (傍白) 毒を持ってな。<sup>63)</sup>

自らの保身のためには、宣誓する場合にさえ「多義の虚偽」や「心裡留保」を使うことさえ厭わない、不道德で信用ならないローマ・カトリック教徒という偏見は、この後も長く続き、<sup>64)</sup>これからはほぼ250年後、英国国教会司祭からローマ・カトリックに改宗した John Henry Newman は、1864年1月、*Macmillan's Magazine* に掲載された Charles Kingsley からのローマ・カトリック批判を受けて、彼の代表作 *Apolocia Pro Vita Sua: Being a History of his Religious Opinion* を執筆するが、この著作のなかで、ニューマンは以下のように述べている。

... here I will but say that I scorn and detest lying, and quibbling, and double-tongued practice, and slyness, and cunning, and smoothness, and cant, and pretence, quite as much as any Protestants hate them; and I pray to be kept from the snare of them. But all this is just now by the bye; my present subject is my Accuser; what I insist upon here is this unmanly attempt of his, in his concluding pages, to cut the

ground from under my feet; —to poison by anticipation the public mind against me, John Henry Newman, and to infuse into the imaginations of my readers, suspicion and mistrust of everything that I may say in reply to him. This I call *poisoning the wells*.<sup>65)</sup>

マーローの『マルタ島のユダヤ人』から250年以上経過しても、二枚舌のローマ・カトリックへの偏見は続き、奇しくも、「井戸に毒を投げ込む」ユダヤ人のイメージと重なって、宗教的二重忠誠への不信感は消えることがなかったのである。

次セクションでは、マーローとほぼ同時代の地中海沿岸地域捕囚記資料から、イスラム教徒より恐ろしいのはローマ・カトリックであるとされていたことを指摘して、エリザベス時代における複雑な諸宗教観を考察するものとする。

(「マキアヴェリ」の神(2)に続く)

(注)

- 1) Arbel, 182. 安息日遵守規定があるために、ユダヤ人は船主ばかりか船員になることさえ伝統的に阻まれていたからである。厳密には安息日に嵐があっても難破を避けるために各種労働ができないのだ。Arbel, 172-184.
- 2) Honan, 250-251.
- 3) セファルディ・およびアシケナジ・ユダヤ人については Bonfil, Davis and Ravid と Ruderman がその歴史の変遷を詳述している。但し、ヴェネツィアのユダヤ人はシャイロックのような大規模商業用貸付を行うことが禁止されていたので、『ヴェニス商人』に登場するシャイロックは、史実に基づくものではなかったとされる。この点については Davis and Ravid, 26 参照。また、この時代の地中海交易とヨーロッパの消費生活については、Arbel, Brenner, Brotton, Dursteler, Jardine, Peck, Smith and Findlen 等が詳しい。
- 4) Church papist については Walsham 参照。
- 5) Stanic, 81, 85, 86.
- 6) Stanic, 81, 88.
- 7) *The Jew of Malta*, I. i. 179-184. 小田島訳, 20-21.
- 8) *The Jew of Malta*, II. ii. 4-7. 小田島訳, 47.
- 9) Stanic, 85-86.
- 10) Stanic, 87-88.
- 11) 『君主論』第15章 池田訳, 92.
- 12) *The Jew of Malta*, I. ii. 272-273. 小田島訳, 35.

- 13) Honan, 263.
- 14) Honan, 254.
- 15) Honan, 256, 264. 尚、ロペス事件については、Katz, 49-106 が詳しい。
- 16) Honan, 264.
- 17) *The Jew of Malta*, Prologue, 1-4. 小田島訳, 8.
- 18) James R. Siemon による *The Jew of Malta* の注 3, p.9. Siemon は第3代ギーズ公アンリが、聖バーソロミューの虐殺の指揮に当たったとしているが、最新のギーズ公アンリの伝記研究によるとこれは否定されている。Carroll は、虐殺当時、パリのギーズ公アンリ邸に匿われていたプロテスタントがいたこと、ギーズ公アンリ配下の者もプロテスタントを保護していた点を挙げる。母后カトリーヌ・ド・メディシスと廷臣たちが、ローマ・カトリック勢力によるユグノー教徒の指導者コリニー提督殺害と、聖バーソロミューの虐殺に対する民衆の反発を、ローマ・カトリックの最有力者ギーズ公アンリに向けることで、なんとか事態を收拾しようと画策していたのを、当のギーズ公アンリ自身がよく知っており、ギーズ公アンリが出来る限り虐殺からは距離を置いていた点を挙げている。Carroll, 217-220.
- 19) Holt, 82.
- 20) Holt, 132. Carroll, 290.
- 21) Holt, 135. Carroll, 297.
- 22) Petiena and Arienzo, 3-4. 1532年、ローマで『君主論』イタリア語版が出版、1553年にはフランス語訳が出版されている。Petrina, 16. マキアヴェッリの『戦争の技術』だけは、既に1560年、Peter White によって英訳されている。Petrina and Arienzo, 6.
- 23) Petrina and Arienzo, 6.
- 24) Raab, 52-53 及び Petrina and Arienzo, 8.
- 25) Petrina and Arienzo, 6.
- 26) *The Jew of Malta*, Prologue, 9-15. 小田島訳, 8-9.
- 27) Petrina, 15.
- 28) *The Jew of Malta*, III. Iv. 96-97. 小田島訳, 85.
- 29) James R. Siemon による *The Jew of Malta* の注 96, p. 77.
- 30) Donne, 97. 『イグナチウスの秘密会議』において、地獄にいるイエズス会の創立者聖イグナチウスは、同じく地獄にいる教皇ボニファティウスを押しつけてローマ教皇座につく。ダン は本作品で、地獄ではマキアヴェッリとイグナチウスの勢力が拮抗しているが、ローマ・カトリックには、いつの時代にもマキアヴェッリをしのぐ修道僧がいると評する。Donne, 31. 63. 森 ゆかり「ジョン・ダン『イグナチウスの秘密会議』における公会議主義(1)」, 14.

- 31) 『君主論』第18章 池田訳, 105.
- 32) Arbel, 64. また実際、オスマン帝国による1565年のマルタ島、1570年のキプロス島侵攻時に、ユダヤ人はオスマン帝国を支持した。Matar, 174.
- 33) *The Jew of Malta*, Prologue, 28-35. 小田島訳, 9-10.
- 34) Honan, 256.
- 35) Carlebach, 116.
- 36) *The Jew of Malta*, III. iv, 75-78. 小田島訳, 84.
- 37) Carlebach, 116.
- 38) Carlebach, 130-131.
- 39) Carlebach, 67.
- 40) Carlebach, 120.
- 41) Arbel, 188-192. 異教徒の法廷に行くことを禁じる古代タルムードの規定があったからである。Cohen, 94.
- 42) Cohen, xix.
- 43) Davis and Ravid, 7. 故国を追われユダヤ教からキリスト教に改宗した「新キリスト教徒」とユダヤ教に再改宗した「マラーノ」については、Bonfil, Cohen, Davis and Ravid, Ruderman, 小岸等を参照。
- 44) Davis and Ravid, 103.
- 45) 注4)参照。
- 46) *The Jew of Malta*, II. iii. 20-26. 小田島訳, 51.
- 47) *The Jew of Malta*, I. ii. 289-293. 小田島訳, 36.
- 48) 『君主論』第18章, 池田 廉訳, 104-105.
- 49) Honan, 144-145. Nicholl, 147-155.
- 50) Honan, 144, 269-271, 278-280, 338 等参照。
- 51) マーロのスパイ活動については Honan, 82, 120-129, 147-159, 229, 242, 266-271, 278-285 等参照。マーローはケンブリッジ大学在学時、経済的に困窮してスパイ活動に手を染めたのがきっかけで、そのフランス語能力を買われて Walshingham のスパイとして活動した。大学在学中の1584年から1585年スパイ活動のためケンブリッジを3週間留守にしており、修士号取得も危うくなったので、1587年6月9日、枢密院が介入して、マーローに学位取得させた。Baines のスパイ活動とマーロの告発については Honan, 126, 143-145, 269-271, 278, 299, 338 等参照。
- 52) Cohen, 163. Bonfil, 23.
- 53) Cohen, 179.
- 54) Cohen, 169.
- 55) Rose, 89.
- 56) Rose, 89.
- 57) Rose, 89-90.
- 58) Holms, *Caroline Casuistry*, xxiv-xxvii.
- 59) Holms, *Caroline Casuistry*, xxvii.
- 60) Holms, *Caroline Casuistry*, 46-47.
- 61) *The Jew of Malta*, I. i. 168-172. 小田島訳, 20.
- 62) *The Jew of Malta*, II. iii. 48-67. 小田島訳, 52-54.
- 63) *The Jew of Malta*, IV. iii. 29-30. 小田島訳, 111.
- 64) 森 ゆかり「”Truth for its own Sake” シャーロット・ブロンテの『ヴィレット』における反カトリシズム(2)」, 61-64.
- 65) Newman, 6. Ker, 546. Svaglic, xix-xx.

引用文献は「マキアヴェリ」の神(2)にまとめて掲載する。

(受理 平成25年3月19日)